＊＊＊成田山総門そば三升の石灯籠＊＊＊

下記の赤字は石灯籠に彫られている文字である。

永
奉常灯明
代
天保六年乙未
八月吉日

七代目
海老蔵
八代目
団十郎
明治二拾二年六月
再　建

↑1854 没　　↑1874 没

天保六年乙未（きのとひつじ）八月吉日 1835 年は最初に七代目團十郎父子が奉納した年代であろう。
この七代目市川團十郎寄進の石灯籠は安政江戸地震（1855 年）で倒壊したようです。
現在の石灯籠は九代目市川團十郎が明治二拾二年六月（1889 年）最初の台座の上に再建したと思われる。（54 年後再建）
明治三十六年には、市川宗家の門弟たちの集まりである三升会が台座を新しく寄進したようだ。
ここに見られる様に、七代目團十郎は五代目海老蔵を名乗った後も「七代目海老蔵」と刻まれています。かつって七代目團十郎であったところの五代目海老蔵という解釈が正しいと思われる。
台座には市川宗家の三升会の面々の名前がある。
世話人（カメラに撮り拡大したが読みにくい）堀　越　助　七　（左側の灯篭に彫られている）
(堀越は市川家の本名であるが、どのような人物か判明せず又世話人の文字が読みにくい)

左側石灯籠　17 人(台座に彫られている歌舞伎役者 16 人）と世話人　堀越助七

明治三拾六年年六月
◎◎建之
世話人
堀越助七

市川升太郎
市川栗三郎
市川幸作
市川升代
市川団兵衛
市川団八
市川升蔵
市川団吉
市川新十郎
市川宋三郎
市川延升
市川市十郎
市川女寅
市川八百蔵
市川小団次
市川左団次

右側石灯籠　17 人　（台座に彫られている歌舞伎役者）

三　升　会

堀越鐘吉
市川英次郎
市川君太郎
市川芝海老
市川蝠之助
市川男寅
市川鯱丸
市川団子
市川英太郎
市川団次郎
市川右之助
市川左団次
市川猿蔵
市川猿之助
市川寿美蔵
市川権十郎
市川団蔵

灯籠には市川宗家の定紋（三升）及び三升会及び上記赤字の文字が彫られている。

三升会とは市川宗家の門弟達の親睦団体であろう。

この石灯籠を史実と私なりの推理で考察してみたい。
ここに最初にあった石灯籠は 1835 年に七代目市川團十郎父子が奉納したであろう。即ち
七代目市川團十郎（五代目海老蔵）と八代目市川團十郎（七代目團十郎の長男）父子である。
この最初に奉納した石灯籠には「祈子孫蕃育」の文字が彫られていたと思われる。
しかしこの石灯籠は、建立から 21 年後の 1855 年に発生した安政江戸地震で倒壊破損した。
石灯籠の破損を知らされた七代目團十郎は 、
「修腹を行うにあたっては経費の一部を負担したい」
との内容の書状を御隠居様宛に送っている。（この書状は最近発見されました）
この書状には年代が記されていない為、何時か分からないが、おそらく 1855 年であろう。
＊ ＊＊＊＊台座のみが残った状態で数十年の歳月が 流れる。＊＊＊＊＊
現在の石灯籠は、この台座の上に九代目市川團十郎が明治 22 年 6 月（1889 年）に
七代目市川團十郎（五代目海老蔵）と八代目市川團十郎（七代目市川團十郎の長男）の
追善供養の為、最初の台座の上に再建奉納した石灯籠と思われる。　（54 年後再建）
明治三十六年には三升会が台座を新しく寄進したようだ。

この石灯籠に見られる様に、七代目團十郎は五代目海老蔵を名乗った後も「七代目海老蔵」と
刻まれている。
かつって七代目團十郎であったところの五代目海老蔵という解釈が正しいと思われる。

結論として

現在の石灯籠は、八代目団十郎（七代目團十郎の長男）と七代目團十郎をかって名乗った五代目
海老蔵の追善供養の為に九代目市川團十郎が明治二拾二年(1889)再建したと思われる。
八代目團十郎（1854 年没）七代目團十郎（1874 年没）
故に現在ある明治二十二年（1889 年）に再建された石灯籠は奢侈禁止令とは、関係ない。
54 年後の 1889 年再建の石灯籠に天保六年（1835 年）乙未八月吉日の文字が刻まれている。
これは最初に奉納された石灯籠（天保 6 年）は、七代目市川團十郎と八代目市川團十郎父子が
奉納したと思われる。
1832 年に倅が八代目團十郎を襲名し、七代目は五代目海老蔵を襲名している。
台座は明治三拾六年（1903 年）市川宗家の門人の集まりである三升会
（最下段に彫られている 23 名）が寄進した物である。なお世話人は堀越助七である。
現在の灯籠は七代目團十郎（海老蔵の時）が天保の改革の奢侈禁止令による江戸十里四方追放
とは関係ない。理由は明治二十二年に再建されたものであるから。（時代が違う）
天保六年乙未　八月吉日の文字は最初の灯篭が奉納された年代と思われるが判明せず。しかし
天保六年は西暦 1835 年である。この年に八代目市川團十郎と五代目市川海老蔵
（七代目市川團十郎）が寄進した物があったと思われる。
もし最初の灯籠が 1835 年に寄進されたとすると、５4 年後に再建されている。
短期間（20 年で地震により倒壊）に最初の物が無くなった（壊れた）のは何故か？
安政 2 年（1855 年）に発生した安政江戸地震で壊れたようです。

安政江戸地震	規 模	マグニチュード	6.9-7.4	直下型地震
	最大震度	震度 6：江戸	5：成田	成田の震度は５であった。

以後の調査では安政江戸地震で倒壊したとの記述あり（新成田山史より）

七代目市川團十郎（1791～1859）　　1799–1832 この間團十郎
　十歳で團十郎を襲名し四十二歳で長男（10 歳）に團十郎を継がせ海老蔵を襲名する。
　二代目、四代目、七代目等は現在とは逆で團十郎から海老蔵と襲名していた。
八代目　市川團十郎 は七代目市川團十郎の長男（1823 年-1854 年）（大坂で自殺 32 歳）
　二代目市川新之助（１ヶ月）　→ 六代目市川海老蔵　（2 歳）
　　→ 八代目市川團十郎（10 歳）（1833 年）　　俳名は白猿
天保 13 年（1842）、天保の改革の旋風が吹き荒れるなかで、五代目海老蔵(七代目市川團十郎)は突如江戸南町奉行所から、手鎖・家主預りの処分を受け、さらに江戸十里四方処払いとなる。
奢侈禁止令に触れる派手な私生活と実物の甲冑を舞台で使用したというものだったが、要するに罪状は何でも良く、その目的は江戸歌舞伎の宗家として江戸っ子の誰もが認める「あの團十郎」を手厳しく処罰することにより、改革への腰の入れようを江戸の隅々にまで知らしめることにあった。
天保 3 年（1832）、息子・六代目市川海老蔵に八代目團十郎を継がせ、自身は五代目市川海老蔵を襲名する。　　（五代目海老蔵を自分の為に空けておいた）

観光協会の説明文

　　７代目と８代目が寄進した石灯籠
　天保６年（１８３５年）８月に奉納。仁王門下の参道にある。
　この石灯籠の奉納が後に七代目が江戸追放となる一因にもなった。

観光協会の説明文には 7 代目　8 代目と書いているが、7 代目の誰なのか 8 代目の誰なのかわからない。（團十郎であるが、一般の人には分からない）また奉納した年も間違っている。
現在の石灯籠は明治二十二年六月（1889 年）に奉納（再建）したものである。

石灯籠に彫られている八代目団十郎（1823-1854 年）と七代目海老蔵（団十郎）(1791-1859 年)は、この石灯籠を再建した明治二十二年以前（江戸時代）に亡くなっている。

下記の様な説明文が適当と思います。

現在の石灯籠は明治二十二年六月（1889 年）八代目市川團十郎（七代目市川團十郎の長男）と七代目市川團十郎（八代目の父）の追善供養のため九代目市川團十郎が寄進した。
又台座は市川宗家の門弟たちが明治三十六年（1903 年）に寄進したと思われる。
(三升会は市川宗家の門弟たちの親睦会であろう。)
　又七代目海老蔵と彫られているが、これは長男に八代目を襲名させて自分は五代目海老蔵を再度襲名したので「七代目團十郎であるところの海老蔵」ということである。
　　「この様な表現は他のお寺（箸蔵寺）に團十郎が奉納した石灯籠にもみ」られる)

　石灯籠に彫られた七代目　海老蔵とは、七代目團十郎をさす。
　　かつっては七代目團十郎であったところの五代目海老蔵を表す。
　　下記の七代目海老蔵ではない。
　七代目　市川　海老蔵は七代目市川團十郎の三男（1833 年 -1874 年）
　　幕末から明治初期の歌舞伎役者
　　明治 7 年（1874）海老蔵を襲名するが、この年の１１月舞台にあがることなく死去
　出世稲荷の團十郎奉納の石灯籠にあるプラスチックの表記も訂正した方が良い。別項に記載